

■
戦場・軍隊

◆相原 正治（78歳）

発車合図のベルの音

戦場・軍隊 ●

終戦の土壇場になっても「どうして自分には召集がこないのか。チャキチャキの現役なのになあ」と家族と秘かに語りあい、はずかしいやら、反面召集がこないにこしたことはない「運がいいのかなあ」などと自分なりに、受け止め対応しつつ、專業の警視庁警察官として首都東京の治安維持に挺身していたものの、続々と元氣な男性のほとんどが歓呼の声に送られて出征していく雄姿は、さぞ本懐と当時はうらやましかった。

昭和十九年十二月三十日、暗黙のうちに、東京の歳末警戒に就勤し、帰宅。この日は夜間勤務がなく午後六時ごろ「只今」と帰宅を告げると、母親が飛び出きて「正治、お前にも召集令状がきたよ」と亡父に報告のため仏壇に供えてあることを半泣きで言われ、自分も「自分にもきたか、よし」と氣を持ち直したが、老齡の母親と家内の事後のことを考えたとき、感無量で、二人に向って「後のことは頼む」と決断した。

このとき、ふと、亡父は、かつての日露戦争の際、乃木大

將の統率された第三軍に属し、この功勞として「功七級勲八等の叙勲」（金鷄勲章）を拝受、ときどき自慢し「今の若い者は根性がないなあ」などと言われていたのを思い出した。亡父の遺品の「従軍日記帳」は、家宝として現在も保存している。

歳の暮の三十日召集令状を受け、示達された昭和二十年一月三日午前九時千葉柏市の連隊に出頭し即日「作業指揮班長（本部付）」を命ぜられ、その日の深夜、作戦上行先も明示されず移動し、到着したところは、愛知県下の渥美半島の突端、ここが駐屯基地であった。

ここで、「本部から（戦爆連合航空隊基地―滑走路）を約二ヶ月の予定で突貫工事を強行する」と、隊員約三百名に対し、「いよいよ本土決戦が間近い、それに備えるのが、任務だ」と訓示があり、参集した隊員は、それぞれに受け止め、覚悟したのか、微笑むどころか暗黙のうちに、それぞれが任務についた。

自分は、「山の掘削」「トロツコの誘導」「スコップの効率

使用方法」等、全くの素人でゲートルの巻き方も都会育ちの自分には、困惑で指揮班長として今更返上の悲鳴はあげられず、「よし俺に付いてこい」と自分の決意と協力体制について、隊員に指示し賛同を得て強行し、無事故でしかも予定より半月も早く竣工でき、残務処理をするのみとなった。

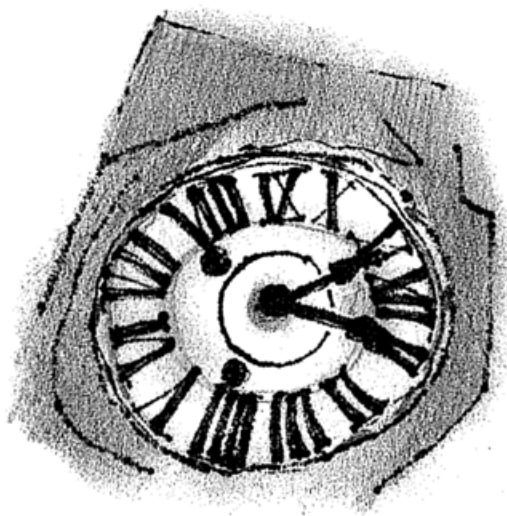
昭和二十年二月二十八日と記憶しており、直轄部隊長から呼び出しをうけ「君他二名はこのたびの突貫工事に際し、指揮者として率先挺身し、目的達成に尽くした労で、一泊二日の外泊を許可する。もう、これで家族と会えなくなる。帰隊を待っているぞ」と突然予期もなかった朗報で、一時も早く、家族が疎開している埼玉県岩槻市に外出したく、気持ちはずでに埼玉に向かっていった。

二月二十八日午前九時、豊橋駅の列車ホームには、上下線（東京行、鹿児島行）の列車が同時停車中で、どちらか判らないが発車合図のベルが鳴っているではないか。自分には心が弾み、列車を詮索する余裕はない、神の助けとばかり夢中で車内に飛び込んだが、なんと反対方向の鹿児島行に乗ってしまった。

それほど混んではいなかった。座席の前のお年寄りから「兵隊さん、どちらへ、こんなに戦争が激しいときに、よく許可されましたね」などと話合っていて「兵隊さんは東京へ行くの、それは大変、東京は向うの列車よ」と大声を張りあげるや窓を明けて「駅長さん助けて、列車を間違えた兵隊さんが、乗り換えるまでベルを押して」と協力して頂き、

駅長さんも「よし引き受けた」と乗り換えが終わるまでベルを押しながら、終わると判断されるや列車は、東京に向かって発車したので、車窓から駅長さんに礼を言おうとホームを見ると駅長さんが微笑みつつ、手をあげて共に喜んで頂いた姿は、今も豊橋駅を通過したり、話題になると、駅長さんの雄姿を思い出している。

自分は、親子二代にわたり「耐え難きを耐え、忍び難きを忍ぶ」と終戦の詔勅に使われた由来についても体験して、文字通り大正・昭和を生き抜いてきた人達にとって、戦争は避けて通れないテーマではなかったことを想起する。



◆阿部倉国治（84歳）

行けども行けども

戦場・軍隊 ●

戦争それは悲惨であり、残酷で悲しむべき出来事である。

私は現在白金二丁目に居住しているが、昭和十二年ごろは白金志田町において工場を経営し、従業員も二十五人いて繁栄の途にあり、家庭も平和で楽しかった。七月七日、日支事変が勃発して間もなく、陸軍上等兵として召集された。祖母、ふた親、妻と二人の子供、大勢の人々を抱えていて途方にくれたが、仕方の無いことである。生きて帰れるかどうかかわからない不明の地だ。不安と心配、複雑な思いを胸に永年の住家を後に、旗の波に送られて出発の途についた。

前日から泣いていた祖母が私に近づき小さな声で、「お前は一人身ではない、どうか生きて帰って来てくれ、お前が帰るまで私は死なぬ」としわだらけの手で私の手を握りしめ目には涙が光っていた。「おばあちゃん必ず生きて帰るから待っていてくれ」と言ったが祖母の姿を見たのはその時が最後であった。その後の思いだが、無事で帰れた姿を祖母に見てもええなかったのが残念である。

私の部隊は、通信隊で部隊と行動を共にする、前進すれば

共に前進、後退すれば共に後退する等通信任務を確保する役目である。我が軍の上陸地点の相手方の陣地は非常に堅固で有利、兵力も多い。我が方は不利この上もない。足場も悪い地点。陣地もなく攻撃するので激戦がつづき死者、負傷者が続出、味方の苦戦は言語に絶するものであったが、おそらく相手方も我が方のねばり強さにはてこずったと思う。この戦闘で部隊長が戦死され（当時の新聞紙上で知られた人もおられると思うが）その苛烈さを物語っている。何日か過ぎ、我が方は有利に展開し、前進にうつった。こんどは遮二無二（しよにむに）前進となり、夜も昼もない。ぼつぼつ人家はあるが全く人影はなく、家屋は無茶苦茶に荒れている。生物の死体があるらしく悪臭が漂って頭がぐらぐらする。降り出した雨に頭からうたれ全身ぬれねずみ。行先は何処かわからないが、行けども行けども道は膝つく泥濘（でいねい）。水は赤色で、それで炊いためしは、赤飯の様にぼそぼそで腹がへっては戦は出来ぬと目をつむつてのみ込んで飢えをしのぎ、また前進。こんな時、側面から攻撃されたらそれで終わりだが、何とか助かった。前進

は続く。もたもたしていると置いてゆかれてしまう。互いに人の事まで手がとどかない。自分が歩くのがせいじっぱい。人間も疲れていると歩きながら眠れるしまつだ。食もなく水は泥水、タバコもなく何日も歯は磨かず口の中はぬるぬるで歩き続ける。人間の体というものはなんと丈夫に出来ているものだ、驚くほど困苦欠乏に耐えられるものだと思った。それが一発の子供の小指くらいの銃弾であつという瞬間、命がなくなってしまう。また重傷で、一生不自由な体になってしまう。

悲しさ何と悲惨な事であろうか。考えてみれば現代、月の世界までゆけるような利巧な人間の世の中でなぜ戦争など始めるのだろうか。中でも戦争を経験された人々は人一倍平和を願い平和を尊んでいる。

この一文は私が三度召集されたがその期間の一場面であり、戦死された戦友、戦争の犠牲者の冥福を心から祈る次第である。

召集された年 昭和十二年 三十二歳

終戦の年

四十歳



(港区教育史資料)

◆新井 良平（70歳）

イラワジ会戦の敵襲

戦場・軍隊 ●

インパール作戦の敗北で我が部隊も半数以下に減り、食糧も無く雨の白骨街道を歩き続けてやっとビルマ領まで山を降り、昭和十九年十二月には、イラワジ河の東にあるミンデ、オッポー、ショウピンの三部落に野戦病院を開設していた。部隊本部はミンデの南方シミガンという小さな部落だった。敵戦闘機は頻繁にやって来るがマンガーと椰子の木が多い故か発見されず、銃撃も受けず村に残った部落の人も平靜だった。

しかし平和なる日も長く続かず昭和二十年二月中旬ごろより何となく様子が変わって来た。部落の人に落ち着きがなくなり動揺しているのが感じられた。二十日ごろには親しくしていた住民も姿が見えなくなつた。不吉な予感で一杯だった。そして二月二十三日の朝、行李分隊の歩哨が、「明朝、敵がシミガンを攻撃して来る」という緊急情報を知らせに来た。親的なビルマ人が通報してくれたそうだ。この時、約四百数十名の患者が入院していた。この患者を一刻も早く護送しなければならない。本部からの命令で患者を護送する部

隊と残つて敵と戦闘を交える部隊に分けられた。私は護送の任務を与えられた部隊だったので早急に撤退準備に入った。今夜半、牛車を連ねて東方のアヤドウからマイクテイラに撤退する作戦だ。

私は三十数名の独歩患者と牛車二輦に資材等を積んで撤退する責任者として二十三日夜半、大西大尉指揮の下、月明のミンデ部落を出発した。荷物を少なくして軽装だったが牛車と患者と共に砂地を歩くため時間がかかり、二十四日の夜明けが近付いて来て終った。明るくならない内に牛車を遮蔽し、牛を木の下につなぎ、患者は木の下に入るように指示して私も加藤兵長と木の下で小休止に入ったら間もなく夜が明けて来た。

砲の音と機関銃の音が絶え間なくきこえている。間もなく七、八機の戦闘機が現れ超低空で頭上を飛びまわり始めた。観測機も二機やって来た。英空軍のマークが良く見える。この時、突然右、後方より銃撃され不意だったので身を伏せて様子を窺った。百メートル位に敵のジープ、四、五両が近付

き車上より軽機と自動小銃を撃っているが徒歩の歩兵は見えなかった。患者は一人残らず身をかくしてしまつたらしく見当らない。ジープも警戒しているのか近付いて来ないようだ。銃弾はビュービューと鋭い音をたて埃^{ほこり}を上げて前後左右に突き刺さる。めくら撃ちなのか幸い一発も当たらないのが不思議なくらいに思えた。機密書類である病床日誌の梱包を牛車に積んであるので躊躇している内に自分たちが一番最後になつてしまった。加藤兵長を誘い二人共銃だけ持つて、私が一瞬早く前方の凹地目がけて飛び出した。待つてましたとばかり銃声と同時に弾が飛んで来た。この時、キャタピラの音と共に戦車砲を撃つて来たが五、六十メートル右前方に着弾していた。戦車は十輦^{しち}くらいのようだった。相変わらず超低空の戦闘機が、うるさい程頭上を旋回しているが一発も撃つてこない。敵と我々が余りにも接近しているので機銃掃射も近くに在る戦車からも撃つてこないことがわかつた。

ちょうどこのころ、我々患者護送隊の撤退を守るため部落に残つた円谷少尉以下二十数名はミンデ村にて敵と交戦、全員戦死、尊い犠牲となつて患者と我々を援護してくれたのである。この撤退中、角田少尉以下五名、アヤドウ西方でも六名、ほとんど戦車砲による戦死だった。目的地のアヤドウ附近には夜に着いたが燃えていて入れず、そのまま通過、夜明けに患者及び隊員が、ある程度集結したので、大西隊長の命で部隊を四班に分けて撤退することになった。少人数の方が行動も敏速だし、敵に発見されにくいとの判断からである。

私は大西隊の後衛を命ぜられ、部隊の後方五百ないし六百メートルを小銃編成十名でシャン州の山岳地を歩くことになつた。

間もなく野戦病院長の土井軍医少佐がこの時の戦闘の責任をとつて自決されたが、誠に痛恨の極みである。

英国公刊戦史「対日戦」に第二野戦病院の円谷隊の奮戦が記されている。

「二十年二月二十三日第二五戦車旅団がウエランを通過した翌日、タウンター南四マイルで日本軍の後衛が断固として戦つた。明らかに病院の撤退を掩護^{えんご}するためである。何故なら自決した病院の患者と思われる百八十名もの多数の死者が発見されたからである。」

以上は円谷少尉以下二十数名であることを証明している。病院長代理、大西軍医大尉の師団司令部への報告書にこの時の戦況が詳しく書かれている。その控を預かつて還つた私は現在も大切に保管している。二度と起きてはならない戦争であっても、決して忘れてはいけない事でもある。

◆新井 良平（70歳）

インパール作戦の撤退

戦場・軍隊 ●

昭和十九年六月、第二野戦病院としては最前線の、インド領アッサム州のライマナイのジャングル内で病院を開設していた。眼前にロクタク湖を見下し、インパール道が手に取るように見える山の上である。戦闘機や偵察機は日に何十回となくやって来る。最前線が近く砲、爆撃と銃声が終日続いている。夜になるとインパールの灯が遠く上空を明るくしていた。

毎日 影^{おびた}しい傷病兵が入って来る。血に染まった軍衣は破れ、顔は青ざめ眼だけが光っている。早速治療に走りまわる。わずかだが食事も与えなければならぬ。薬剤も極端に不足して思うように治療も出来ない。マラリアで高熱を出しても、キニーネを飲ませて土の上に携帯天幕を敷いてゴロ寝である。独歩患者は歩いて山を下りさせる。重傷者は担架又は輜重^{しちよう}の馬で下りるのだが爆音がすれば退避させなければならぬ。衛生兵も輜重兵も疲れが重なり、重労働で倒れる者さえ出てきた。毎日米粒^{ツシ}を探すようなお粥とジャングル野菜の塩汁なので栄養失調が原因だろう。たまに塩干魚の一切れ

でも配給になると大変なご馳走だ。

次第に戦況が悪化し、ますます患者が多くなってきた。やがて野戦病院が患者であふれ、何もかもほとんど底をついてきたころだった。この日は雨模様の天気にもかかわらず戦闘機に混じって観測機までが低空で飛びまわっていた。機銃掃射もなく爆弾も落とさないが無気味だった。翌七月十二日も患者収容等で目の回る忙しさだった。

運命のこの夜、真暗な雨の中、突然、西方稜線よりすさまじい砲撃が始まった。天幕の前方に地響をたてて命中した。擬装していた木が吹とび悲鳴と呻き声、阿鼻叫喚^{あびきょうかん}とはこんな状態なのだろうか、患者の方にも行けず西南方の凹地にある水源地点まで駆け下りた。この大砲撃により患者、自隊員合わせて六十数名の死傷者が出た。最近飛行機が多く不安を感じていたが、昼間の観測で照準を合わせておいたのではなかったのか。銃撃をしなかったのも病院を発見しすでに知っていたながら、我々を移動させないための作戦だったようだ。真の暗夜、雨の中、これほど正確に命中するとは思われ

ない。

司令部からの撤退命令により翌十三日早朝、多勢の患者を連れて撤退することになった。独歩、担送患者と共に山を下りたのだが、担架は肩に喰い込み、足は滑るし栄養失調の自分の体力が情なかった。やっとインパール南道の近くまで、来たものの敵戦闘機の街道荒しが待っている。本道上を間断なく飛びまわり一寸でも動くものを見付けたら容赦なく機銃掃射だ。野戦病院の小山軍曹他三名が昨日の砲撃で重傷を負い、担架で運ばれて来たが、これ以上戦友に迷惑はかけられないと手榴弾で自爆してしまった。雨の中で斃れ道路沿いにあるいは木の根元に遺体そのまま置きざりとなり、白骨街道となってしまったのである。遺体のほとんどが死を予知してかだれかの傍に寄り添うようにして息を引きとったようである。不思議に必ず何名ずつか集まっているのだ。死の直前、淋しさからかまた最後まで戦友と離れたくない心情の表れかも知れない。これが人間本来の姿なのか。こんな光景を各所で見た。敵のスピットファイヤーがうるさいので団体行動不能となり、各個行動で一本しかないインパール本道をビルマに向かって歩くことになった。三十八マイル地点から三十メートル入った木の近くに進攻の時戦死した篠塚上等兵を埋葬して木に印を付けておいたが、こんな状況の撤退で、ついに別れも出来ず心残りだった。

国境近くに爆弾坂と呼ばれる箇所がある。敵機が道路に添って時限爆弾を落して行ったのである。山の中腹だが道路幅

が少し広く平坦になっている。走って通りたいが体力がなく運を天に任せて足早に通過したが、緊張と冷汗の数分間だった。また、その先トンザンの手前には我々の退路が敵に丸見えの所があった。だれが書いてくれたのか注意の立札でわかったのだが敵の狙撃兵が狙っている箇所だ。我々よりも先まわりしたグルカの狙撃兵が待ち伏せているらしい。約四、五十メートルだが危険だ。少し待っている中にまた雨が降り出したのでこの時を見計らって通過した。幸い一発も撃たれなかったが数時間後に通過したものの中に犠牲者が数名出たことを後で聞いた。

実に悲惨な撤退行軍の連続だったが、作戦発起前に終結したジャングル内のシーンに雨に濡れながらやっとたどりつくことが出来た。

遠藤上等兵が衰弱し切って小屋にいたが、声をかけても目が受け止めるだけだった。翌日小雨の中を数名でカレワに渡河し、チンドウィン河を渡って、再び懐しいビルマ平原に出ることが出来た。涙が出た。うれしかった。ジャングル内のバラック小屋で米と塩を買い、久し振りに食事をした。多少、元氣を取り戻した我々は、集合地のトウジン目指して、また歩き出した。

◆今澤榮三郎（76歳）

兵役の義務

戦場・軍隊 ●

昭和十五年七月一日、この日を境に私の青春の運命が一変してしまった。召集令状という通称赤紙は、いとも簡単に社会生活を営んでいるものを壮丁という名で兵舎の門をくぐらせてしまう。当時、芝区生まれで昭和九年度徴集の私は麻布聯隊区で甲種合格であったなら、赤坂の歩兵第一聯隊に入営するのだが、第二乙種ということで軍隊生活には補充兵で、縁がないものとおもっていた。支那事変が長びいて、友人の一人二人と召集をうけ出征兵として歓呼の声におくられて行くが、私のところには来ないのかも知れないという思いもあったが、現実のものとなって戸惑ったが度胸をきめざるを得なかった。

入隊先は世田谷にあった第二陸軍病院という、およそ軍隊らしからぬ標札のある門に入った。兵営といっても小学校の校舎のようでもあった。しかし、窓から覗いている人の顔がみなたくましい兵隊さんであるが、看護婦さんの姿も見えたので何故かほっとした。二百人ばかり裸の男は大講堂で手際よい順序で身体検査が行われた。そして、その場で専用バス

に乗せられ、命令という万事あちらまかせの指示通り人形のように扱われ、着いたところは同じ世田谷の大蔵分院で、衛生兵としての教育を受けるコースに動かされていた。

七月といえば夏も盛りであった。汗をよくかき、洗濯もよくしたが、無我夢中の訓練でいつの間にかインキンになっていた。痒さに我慢できず班付に申し出た。班付というのは初年兵教育のため班にいる教育係で、学業や軍事訓練の優秀な選抜された古年次兵である。幸いにインキン仲間は多数いたので、班長室に連れて行かれ、一名ずつ順番に、恥も外聞もなく、ふんどしを脱ぎ、いや応なしに患部にサルチル酸をつけられ、飛び上ってしまった。人権問題などひとかけらもない頃の話だった。

衛生兵教育は三カ月であったが、最初の一カ月間は、歩兵操典、軍隊内務令など一般の兵科と同じ軍隊教育であった。その間、新聞の活字にはお目にかかれず、もちろん、ラジオも聴いていない。各箇教練から分隊、小隊の教練といわゆる典範の学習の詰め込み教育と精神訓話で根性をたたきこまれ

た。「軍人に賜わりし勅諭」を丸暗記するために必死だった。厠^{かまど}に入っても暗誦した。クサイ話だが真剣だった。なぜか、三カ月の教育終了のとき、もし暗誦ができないと外出させないという。覚えの悪い兵隊に質問が集中し、他の者が傍観者として笑い顔でも見せたら、あとの祭である。連帯責任で全員にピンタが飛んでくる。対抗ピンタという兵隊同士が対面して殴り合うのが一番つらかった。

朝起きてから就寝時まで、誰かの目で見られているようで全くスキがない。おそらく私の目は異常に鋭くなっていただろう。各班に三名宛、班付がいて一班から五班までの教育班の中で他の班の班付の目からも監視されているようで、息がつまるような生活の連続で、身も心も鍛えられていった。このまま一般の社会生活に入ったら、不可能なことはないのではないかと、ふっと考えたこともあった。人を殺す戦争を目的とするのでなければ体験としては、それなりに意義はあるのだが。

外出日には小田急で新宿に出て、同年兵たちと武蔵野館やムーランルージュの前を通り、その隣りにあったヂャスミンという喫茶店でのひととき、ほていや（現在の伊勢丹デパート）の隣りにあった白十字で義兄とケーキを食べたことなど、戦地でのとどかぬ夢で現われた懐かしい思い出の一コマとなっていた。

戦地へ行くことが決まったが、最後の外出日に家に帰り、母には「直ぐ帰ってくるよ」と気軽に別れを告げた。けれど

も、これが母との永遠の別れとなった。

兵隊は軍服も靴も自分の身体に合わせるのではなく、それら被服の中に収まるように順応していかななくてはならない。個人が全体に統べられるために個性を生かすか、全体に仕組まれていくかは個人の意志の問題になる。私は応召する前は敗戦国の民衆がいかに悲惨であったか、歴史の教訓から戦争には勝たねばならないと、自分本位の考えをもっていたことは偽わらない心情だった。そして、西欧の植民地政策下に呻吟するアジア民族を解放するという戦争の論理はわかっていたが、それなら朝鮮半島や台湾を統治しているのは、どのように理解してよいのか屈折した疑問が常に胸の中で、くすぶっていた。それも、昭和十三年一月十六日の近衛声明の『国民政府を相手にせず』の文中にあった「兄弟^{カキ}隣^{イナリ}ヲ相^{アイ}関^{カン}ク愚^コヲ止メ……児孫ニ武器ヲ執^{カキ}ラシメナイ時代ヲ創造スルタメ、コノ時代ニ生^ナラシメケタ我等ガ最後ノ武力行使ヲスル」の意図と解釈して、昭和十五年九月の末、宇品を出航する輸送船に身を委ねた。

◆太田 徳(80歳)

思い出遠く限りなく——フィリピン北部ルソン島

戦場・軍隊 ●

昭和十九年九月五日、大東亜戦争も、日増しに、烈しさを加えて来ました。この日、召集令状を受け取りました。

当時私は、横須賀海軍工廠造船部に、籍を置き、日夜忙しく、航空母艦建造に、勤務しておりました。

大阪に集結、第一三四兵站病院に編成され、南方派遣となり、妻、子供三人残し、心ひかれるまま、門司港より、フィリピンへ。現役にて下士適任証を、もらいましたので、輸送船内、班長代行にて、指導に当たりました。

昼も夜も非常に暑く、波荒きバシー海峡に、船も左右に大きく揺れ、船酔に全員ぐったりして、食事ものを通らず、灯火管制下、船底には、戦友でぎっしり、救命胴衣の下は、汗の流れです。魚雷攻撃を、警戒しつつ、ジグザグ航行にて、二十数日間、風雨の未明、マニラ湾に入りました。

長く厳しい体験でした。

兵站病院は開設出来ず、衛生隊全員にて、油タンクの建造に当たりました。

米軍上陸の報に、北へ、北へと、山、また川を越え、ジャ

ングルを抜け、砲撃銃弾の飛び交う中、行軍は続きます。しかし食料欠乏し、バナナの根、芋のつる、春菊などにて飢えを凌ぎ、照りつける猛暑に加え、マラリヤ、塩分欠乏、栄養不足等の障害に、疲労は重く、歩行困難となり、両側に次々と倒れゆく戦友を、助けるすべもなく、心を鬼にし見送りました。また、風雨に晒され、軍服姿の白骨体も各所に見られ、思わず、最敬礼にてご冥福を祈りつつ進みました。ようやくにして、キャンガンに着き、兵站病院を開設し、たくさん兵隊を収容しました。南方特有の熱病、疫病、マラリヤに侵され、苦しむ戦友が、ほんとうにお気の毒で、一心に手当てしました。特に従軍看護婦の、身を捨て、親切に優しく看病して下さる健気な姿に、ただただ頭の下がる思いでした。

でも米軍の空襲はつづき、砲声も途絶えず、未明より、重傷患者は北へ移動し、歩行患者はバナナ畑に疎開させました。

八月十二日、命令により、見習士官、私と、兵三名にて、

第一線部隊に配属されました。米軍は、百メートル前方に入り、猛烈な砲撃を絶えまなく浴びせて来ます。

私は隊長の命により、患者二十数名連れ、移動のため山に入りました。その時、上空の観測機よりバラまかれたポツダム宣言を手にし、日本無条件降伏の大きな活字に、愕然とし、「ああ、日本は負けた」と叫び、いままでの努力、苦勞も、水の泡に帰し、張りつめた魂も砕け、戦友同志、肩を抱き合い、無念さに男泣きに泣き続けました。

天皇陛下の命により、全員下山、武装解除を受け、各幕舎にて捕虜生活に入りました。

各峰よりの下山兵が、あまりに多いので、給食も、一食が、茶飲み茶碗一杯の三分粥です。でも未明より、どた靴に、エンピ、ツルハシ担ぎ、災天下作業の明け暮れです。体力なき戦友は、空腹疲労に力尽き、連日何人かの、尊い生命を奪われました。日が過ぎるにつれ、配給も良くなり、身体も快復しました。でも作業は毎日続き、疲れた重い身に鞭打って、流れ出る汗をぬぐい、バナナの葉陰に涼を求め、スコールを待ち、励まし、慰め合いつつ、唇嚙んで作業を進めました。暑くて長い南方の一日、夕暮には疲れます。でも、戦友全員、真黒に日焼けし、一日も早く帰れる日を願いつつ、意地と根性で頑張りました。作業を済ませ幕舎に帰っても、灯火なく、かすかな陽の光と南十字星の光を浴びながら一食の粥、一杯のコーヒーに、疲れを癒やし、冷水にて洗い清め、憩のひととき。思いは懐し日本、懐し故郷へ、日本はど

うなっているだろうか、妻と子供は元気かな、あれも食べた、これもと、いつも食べる事に話は走ります。

なんとしても日本の土を踏むまではと、励まし、手を取り、肩を叩き合い、夜更けまで語り、誓いました。夢にまで見た、待ちに待った、復員命令が出ました。ようやく、我が身に返り、戦友の顔、顔が、明るく喜びに満ち、溢れる涙は嬉し泣きでした。カラバン集結、沿道に立ち並ぶ住民の、怒りの罵声、石投げ、ねらい打つゴム手砲に、侮辱を受け、悩まされつつ、屋根無し貨車にてマニラに運ばれました。

日本船に乗り移り、心尽くしの日本食のうまさ、懐しい味噌汁の味、はつきりと思い出します。あれ程荒れ狂ったバシ―海峡も、波静かに私達を犒い、迎えてくれました。

着きました。懐しの祖国日本。懐しの故郷、名古屋港に上陸、生きる喜びを噛みしめながら、一路家路に。懐しの我が家妻子の下へ。

時、昭和二十一年十二月二十一日。

一生忘れられぬ、限りなき、思い出と体験です。

◆大場 一広 (68歳)

涙のダモイ (帰国)

戦場・軍隊 ●

「ストローイ、ストロー、(整列)」の声が幕舎に響いてくる。

ソ連抑留中、毎朝ラーゲリ(収容所)で聞かされた言葉である。

ここナホトカの砂浜に並んでいる幕舎の中には、いつ帰国できるかも知れない旧日本兵達が生活しているのである。帰国の期待を持ちつつ「日本へ帰れるなら、何回でも整列してやらあ」と自嘲気味に、外に出て整列をはじめめる。

軍隊で仕込まただけあって、四列縦隊で約二百名が即座に整列をする。ソ連兵は掛け算が出来ないのか、せっかく四列に並んでいるのに、一人ひとり「アジン、ドウアー……。」と数えていく。日本だったら四掛ける五十で二百となるのは、小学生でも知っているのに何と間が抜けているのだろうと思った。

全員を数え終って確認したのだろうか、今度は「サーガンマルス。」の声と共に行進が始まる。ナホトカに集結してから、ソ連兵の号令によって行進するのははじめての出来事で

ある。

隊列を整えて砂浜を行進するのは、楽なことではない。一年半にわたって、ラーゲリでの食事は、少量の黒パンにスケトウダラと、少々の砂糖しか食べていない身にはつらいことであつた。抑留中の作業は道路修理をはじめとして、森林伐採が主な仕事であり生きながらえただけの体力しか保てなかつたのである。尻の肉はゲッソリとやせてしまい、ふくらはぎの筋肉は肉はなくて筋が脛に着いているだけで本当に骨と皮の体格になってしまつていたのである。

何のために行進するのだろうか。ソ連兵は「ダモイ、ダモイ、ヤポンスキー(日本人)」と言っているが、このダモイの言葉には真実がなく、何回もだまされ続けていたのである。その最初は、北朝鮮の興南から約千人の集団で「ヤポンスキー ダモイ」と言われてタンカーに乗せられ、着いたところがウラジオストック。それから貨車に乗せられても「ダモイ」トラックに乗って北上してもまた「ダモイ」何時も「ダモイ、ダモイ」と言つては移動ばかりさせられていた

ので我々にはどうしても信ずることができなかつたのである。

ところが、砂浜から突然コンクリートの道へと移り、波止場に到着する。でも本当に帰国できるのかとまだ半信半疑である。波止場には三千トン級の貨物船らしいのが停泊している。目をこらして見ると船体に白字で、「大侑丸」と書かれているではないか。黙々と行進してきた隊列から、どよめきの声が出はじめる。「これは本当に帰れるらしいなあ」とか、「本当のダモイだ。」「丸と書いてあるから日本の船だ」と。

大侑丸に近づくとは舷側には満艦飾まんかんしやくのように桜の造花が飾られている。復員する我々への心づかいであろう。ああもう四月も下旬だから東京の桜も散ってしまっただろうと思いつつ目を転ずると船尾には日の丸の旗がたなびいている。一年半ぶりに見る日の丸の旗だ。「絶対に日本の船だ」「とうとう日本へ帰れる日が来たんだ」と口々に言いあい、うれしきで心がふるえる。

脚がガクガクとなってくる。行進が停止すると、舷側げんそくからタラップがおろされる。いよいよ乗船開始である。桜と日の丸の旗が目に見えついで離れないままタラップに足を乗せはじめた。

一步、一步、タラップを登りながら、昭和十八年三月に旭川師団に入営、ピンタの初年兵教育、北支の分遣隊で玉碎した戦友、ソ連抑留中栄養失調で死亡した僚友のことなど、過去の苦勞が瞬時に頭をよぎる。

ふらつく脚をふんばってふと船上を見ると、赤十字のマークも鮮やかな制帽をつけた白衣の天使が乗船者をはさむように両側に並んでいる。そして、一人ひとりに大きな声で「ご苦勞様でした。ご苦勞様でした」と頭を下げているではないか。

桜・日の丸・看護婦さん。抑留中に考えもしなかったことが、今現実となっているのだ。感きわまるとはこのことだ。目頭がジーンとして、涙がポロポロとこぼれはじめた。ぬぐってもぬぐっても涙は止まらない。隣や、後の奴も涙を流している。「ウツ、ウツ、ウツ」とすすり泣きの声。そのうち「アーン、アーン」と大声を出して泣き出す奴もいる。

船上の人となって出迎える看護婦さんにお礼を言おうと、口を開いたら「アアリガガトウゴゴ……。」と、あとは言葉にならない。

落涙・鳴咽おえう・号泣・慟哭どうこく。すべてが帰国できる確信の絶叫だったと思っている。

昭和二十二年四月二十六日。大侑丸は静かに舞鶴に入港した。

◆河合 正雄（81歳）

南十字星の下で

戦場・軍隊 ●

戦前、私の家は芝の神明様の傍にあり、父の代より「金モール刺繡業」を営んでいた。わが国の「金モール刺繡」の始まりは明治五年（西暦一八七二年）文武百官の礼装用として大礼服を着用することになり、この大礼服に金モール刺繡がほどこされたのが、そもその起源である。私の家には職人が多数働き、修業中の小僧さんも大勢、寝起きしていた。十一月十五・十六日の「吉備様のお祭」は私共の最大の祭りで、当主、職方、出入りの者を始め、神明芸者も交えての大イベントで懐かしい思い出である。私は昭和十八年十月十二日、いわゆる赤紙―召集令状により、この懐かしいわが家と神明様に別れを告げた。

大阪港より貨物船赤城山丸（五千トン）に乗り、一週間後に台湾の高雄に入港した。途中敵機の襲撃もなく、暑い船倉の生活が苦しい程度だったが、高雄に来て始めて空襲にない肝を潰した。一週間の停泊後マニラに向かい、しばらく待機していたが、ここで乗船以来始めてシャワーを浴び、戦友と共に束の間の平和を味わったのであった。マニラを出て何日

目かに「南十字星が見えるぞ!!」という声で、皆甲板に飛び出して夜空を仰いだ。ふるような星空の中に、ひととき輝く四つの星。ああ、あれが南十字星か、とうとう南洋に来たか、甲板上の戦友は誰一人声を出すものもなく、万感を胸に秘めて青白く輝く星を見上げていた。

マニラから八日目に着いたのが目的地ハルマヘラ島である。ハルマヘラはオーストラリアの北方ニューギニアの西方にあるK型の島である。上陸の前日、ニューギニアのマノカリへ増援部隊を派遣することになり、戦友中から四十人が選ばれ同僚の歓呼に送られて出発したが、全員還らぬ人となってしまった。全く明日は我が身の戦場の悲哀さをしみじみ感じた出来事であった。私共の隊は隊長以下百二十名であったので、残りの八十名がワシレに上陸した。私は生野菜供給班としてガレラに派遣された。ガレラは海を隔ててモロタイ島と向き合っており、私共はそこで現地人を使って農場を作り、生野菜を隊に補給する任務である。ガレラはほとんど赤道の下で、日中は三十五度―四十度位であるが、湿度は低

く、高原だから微風もあり、熱帯特有の午後のスコールは時には戦場であることを忘れさせてくれる自然の恩恵であった。

私共の手足となってくれた現地人にも触れておこう。身長は私共日本人と同じくらい。肌の色は茶を帯びた黒で目はいわゆるドングリ眼。唇は厚くてそり返り、髪はちりちりに縮れている。男はチャラナという長目のパンツをはき、女は上体にバジューというぼたんのない襦袢を着、サロンという腰巻といういで立ちである。男は長さ三十五〜四十センチ、幅五センチ以上もある抜身の刀を腰にぶら下げているのである。私は初めて彼等に会った時、正直いって度肝を抜かれてしまったことを憶えている。もつとも後で、その蛮刀は彼等にとって、鋸代用、包丁代用の生活必需品であることがわかったのだが。ただ困ったのは彼等が働く意欲に欠けていることであつた。もつとも熱帯地域のため穀類など食物は勞せずして育ち、人口もマラリヤのため適度に抑えられ、水産物も豊富だったのである。次に現地人との意思疎通のための言葉であるが、私共日本兵はマレー語の速成教育を受けていたが、現地ではガララ語である。これがなかなか通じないので、結局はジョートウ（よい、結構、イエス等を意味することになった）とジョートーナイ（右のジョートウの反対）の二つであるが、窮すれば通ずるで、この二つの言葉で万事円滑に進むことになった。

現地の生活で忘れられないのは、ロンゲという歌と踊りに

招待されたことである。椰子の實の皮を山と積み上げて火をつけ、日本のドンド焼にちよつと似ていて、燃え盛る火を囲んで踊るのである。夜空に真赤に燃える火は敵機の恰好の目標になったと思うのだが、司令部のお咎めもなかったのは、今でも不思議に思っている。私共も誘われて踊りの輪に加わった。見よう見まねの踊りだが、それがかえって現地人との交流を深めたように思う。

私は良い思い出を書き過ぎたようだ。しかし、地獄はこれからである。モロタイ島を制圧していた米軍は、目と鼻の先から爆撃と機銃掃射を繰り返し、私共は味方機の来援を空しく待っていた。二十年八月十八日米機の撒いたビラで終戦を知り、部隊全員虚脱状態に陥ってしまった。その後、私はアメルバ赤痢、熱帯性マラリヤ、デング熱を次々と患い、血便が出るようになって遂に野戦病院に入院した。

朝起きたら隣の戦友が死んでいた等ということはザラであつた。私は二十一年六月、病院船氷川丸のタラップを喘ぎ喘ぎ上った。内地に帰還し、骨と皮ばかりの私を見た時の家内の顔は忘れられない。この拙文を戦地に散った戦友と今は亡き家内に捧げたいと思う。

◇熊谷 直行（67歳）

回想——戦いの日々

戦場・軍隊 ●

昭和十八年十二月八日 第二補充兵として東部七三部隊に応召。陸軍砲兵二等兵。

東部七三部隊（通称名）は、千葉県市川市国府台（こうのだい）にあった。

固有名は、野戦重砲第一〇連隊であったと思う。

野戦重砲の種別は、一五榴榴弾砲で、けん引車で火砲を運ぶ機械化部隊であった。

昭和十八年十二月十三日 満洲派遣のため門司港を出航。

同年十二月十四日 釜山に上陸。

昭和十八年十二月十六日 鮮満国境（倭門）を通過。

同年十二月十九日 東満総省八面通（はちめんつう）に到着した。

八面通は、裴徳（ひとく）・穆梭（むろ）に隣接するソ満国境の最前線であった。

私の所属した部隊は、通称名満洲第三一〇九部隊で、同じく機械化された野戦重砲で、牡丹江市の守備にあたることを重要任務としていた。部隊長は、神崎大佐であった。私の配属は、連隊本部無線通信班に決まった。野戦重砲の主な兵務

分担は、観測、暗号、無線通信、有線通信、車輛、弾列、砲手である。部隊編成は、二大隊編成で、一大隊は四中隊に分かれ、火砲は一中隊に四門であるから、部隊全部では三二門を有していた。それにけん引車、自動貨車、観測通信車（観測器材、通信器材）などを全て装備して整列すると、まことに壯観であった。

昭和十九年六月一日 第一期検閲を終了し、陸軍砲兵一等兵となった。

同年六月二十日に現役主計下士官候補になった。

同年九月一日 満洲第三一〇九部隊に動員下令があり、同部隊は、沖繩に転戦したが私は、主計下士官の教育があるため、残置隊に編入された。残念に思い何度か沖繩行きを志望したが、いれられなかった。

昭和十九年十月四日 満洲第一〇一四部隊に転属となった。

配属は、部隊本部経理室勤務であった。

昭和十九年十二月一日 陸軍砲兵上等兵に任命。

昭和二十年一月十日 主計下士官としての教育を受けるた

め、満洲第八一五部隊に分遣を命ぜられた。

満洲第八一五部隊は、新京（現在の長春）の緑園台にあった。この部隊の内容は、陸軍経理学校で現地教育を目的としていた。赤い煉瓦造りの三階建ての校舎であったが、風聞では、今も昔のままに残っているという。

昭和二十年二月一日 満洲第一〇一四部隊に動員下令があり、同部隊は、一大隊が沖繩に、もう一つの大隊が九州にむかったが、どちらかの大隊の船が途中、潜水艦に沈められて現地に着かなかったということを、新京の経理学校で聞いた。

昭和二十年六月一日 陸軍兵長に任命。

昭和二十年六月五日 野戦重砲第二〇連隊に転属。（ただし陸軍経理学校に引き続き在校）。

同年六月二十五日 主計下士官の学業を修了し、同日付で満洲第二一〇九九部隊に転属を命ぜられた。（同じ機械化された野戦重砲部隊）

同年七月一日 陸軍主計伍長。経理室勤務となった。

この頃、部隊は対ソ戦準備のため裴徳、南西の山の部分に陣地構築をし、既に大部分の中隊がこの塹壕に進駐を終り、裴徳の兵舎には、残置部隊がいるだけであった。

昭和二十年八月一日 私は業務連絡のため、八面通に出張した。そして八月六日（土）の明方四時頃、兵士寮の女中さんに「兵隊さん、大変だ。ソ連の戦車が国境を越え攻めてきたヨ。」と起された。この時から関東軍の一部は、国境警備

のためソ連軍と戦闘を開始した。私は原隊にとって返し、山の陣地に入った。八月八日頃、ソ連の戦車が現れ、裴徳では野戦重砲を主体とする防衛戦が展開された。近くには満洲第三一〇三部隊（横重、一五糧加農砲）と、三島の一〇糧榴弾砲が布陣していた。前線には独立歩兵、工兵、輜重の各部隊がいたが、既にこの砲兵陣地まで後退してきていたので、ここが第一線となり、ソ連の戦車と日本の野戦重砲の戦いとなった。二、三日はこの線で防禦の任務をつくすことができたが、ソ連の航空機、戦車砲が増加参戦するに及んで、この方面の部隊は全滅した。時に昭和二十年八月十一日、ソ連の戦車はハルビンを目指し進んで行った。

満洲第二一〇九九部隊の部隊長は、全滅の責任を負って頭を拳銃で貫き最後をとげられた。「若い者は命を大切にし、日本の将来のために盡せ。」これが楠本部隊長（大佐）の遺言であった。

◆後藤 宜久（74歳）

私の従軍体験

戦場・軍隊 ●

昭和十八年五月、千葉県習志野新庁舎、第二二聯隊（現在八千代市附近）に補充兵として入隊したのは二十八歳の初夏だった。初年兵としての激しい教育が始まって一ヶ月余、突然、冬軍衣一式が支給されて派遣地は中国北方地区だという事がおぼろげながら予感された。

習志野駅から三々五々分散し、集結地品川駅荷物ホームに集合した派遣兵我々二百余名は「勝ってくるぞと勇ましく」下関連絡船乗場に到着した。

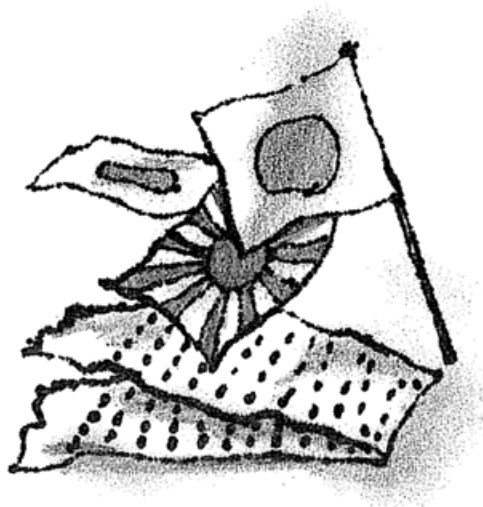
◆苦難の予行演習◆我々一同は連絡船の船倉に押し込められた。燈火管制下の海峡は、潜水艦の出没を警戒し、船のハッチは全部閉ざされ、軍服は着たまま、水筒の水は飲み干し、流れる汗をぬぐう手拭いはグッショリ。二百余名のしぼった汗は船倉の床を船のゆれにつれてザーッザーッと流れる。まさに前途の苦しみのリハーサルであった。釜山からは着剣、装弾の三八式歩兵銃を抱えて、万里の長城をチラリと見て三海関を通過し、北支山東省に入った。赤土つづきの平地をトラックで一時間あまり、鼻・耳の穴まで黄埃オウジンと汗まみれで任

地の單県城タンケン、第八中隊で軍装を解いた。

さてこれから約三ヶ月、一期の検閲の終わるまでつまり肩章が二ツ星になるころまで初年兵の悲惨、無益な教育（ピンタを含む）兵隊組織の矛盾逆にそれを要領よく利用する知恵などを体得した訳である。

◆階級とメンコの数◆将校は一応、高等官であり、指揮官としての身分の保証もあるし当番兵もつくので別格であるが、下士官まではメンコの数である。つまり兵隊の食器で何回飯を食ったか。何日間兵隊生活をしているかである。下士候補上りの班長より四年兵、五年兵の古兵の方が偉い訳、班長が二ツ星に頭が上がらぬ事が往々ある。上海近くのウースンに一ヶ月余、十九年の正月突然今度は冬軍衣を取り上げられ夏軍衣が支給された。いよいよ南方行を覚悟した。上海埠頭フタトから沖繩列島寄りに南進し、台湾高尾に寄港した頃には季節は一変、上半身は裸、しらみで真黒な越中フナトシ褌は海に投げ、メコン河を上り仏印サイゴンに上陸した。更に陸路マレー半島を縦断、貨車はノロノロと椰子ヤシ、ゴム、猿の群がる原生林を

通過、シンガポール（当時、昭南島）にやっと到着した。食料も少なく体力も弱って発熱し入院。本隊を追求して小さな伝馬船でスマトラ經由印度洋上アンダマン島に上陸、本隊に合流した。南方の玉碎部隊である。その後ビルマ方面への転進が決まったが、船が入港せず、島流しのまま終戦となった。その間戦闘も無く二回程空襲はあったが艦砲射撃も近くのニコバル島まで、内地の空襲、原爆を逃れて疎開していたようなもので、かなり華麗な二年八ヶ月の軍歴ではあったが、後続部隊はなく万年初年兵。北支での討伐以外、不本意ながらもつまんな戦歴であった。



◆小林 道雄（71歳）

戦艦霧島の最期

戦場・軍隊 ●

月日の経つのは実に早いものである。

私がガダルカナル島（ニューギニア方面にあるソロモン群島の一島）沖合で戦艦霧島と共に遭難したあの時以来（昭和十七年十一月）既に四十八年の時が経過した。

私は日米開戦（昭和十六年十二月八日）直後、大学卒業と同時に海軍主計科士官として軍務に服した。ミッドウェー沖海戦を初陣として引続き第二次ソロモン海戦、南太平洋海戦、第三次ソロモン海戦等壮烈な海戦に参加する機会を得た。この間私は終始戦艦霧島の青年主計科士官として素人軍人としてはまことに貴重な海戦体験を味わう機会に恵まれた。特に最後の第三次ソロモン海戦では「艇身攻撃隊―決死隊」として参戦したが、ガダルカナル島沖で九死に一生を得た。この時の光景は今思い出しても感慨はつきない一大海戦（夜戦）絵巻であり、私の一生忘れ得ぬ思い出である。

当時の霧島の乗組員の大部分は今はこの世にいない。霧島があの夜ルンガ沖で沈没した時には乗組員千三百五十名の内二百名を失ったが、生き残った人達の大部分はその後また第

一線に送られ戦死したため、霧島の最期をありのままに伝える人は少ない。

霧島の艦橋はすでに真暗である。中央前方の艦長（岩淵大佐）、左斜後方に副長（大野大佐）、中央に航海長（中佐）、その後方に当直士官、左右後方の大きな望遠鏡にかじりつくようにしているのは見張員である。サボ島沖到着は午後十一時頃の予定、あと数十分、緊張感は避けんとしても避けることが出来ない。左斜後方に月がのぼっている。周辺寂然として声はなし、固唾（かたず）をのむ。その時である。左斜後方の真黒な島影に、大型米戦艦が身動きもしないで、じつとこちらをにらんでいる。左の米艦との距離は既に四千メートル以内、声を立てれば米艦に聞こえそうな至近距離、機先を制しなければならぬ。

岩淵艦長は静かな、しかし力強い声で命令。「目標左前方の戦艦！」「撃て！」同時に霧島の各砲門は一斉の火を吐いた。主砲弾は米一番艦「ノースカロライナ」型戦艦（三万五千トン）の前三連装砲塔に命中、米艦は射撃不能に陥った

らしい。霧島に従う駆逐艦わずかに三隻、先方二番艦から四番艦までいずれも大戦艦、悠然と姿を現わす。四艦より霧島一艦めがけて猛烈な集中砲撃が開始された。ダツーン、ダツン、ドカンドカンキューキュー砲弾が頭上近くを通過する時にはこんな金属的な、いやな音がする。艦橋でこの戦況を記録していた私は一瞬ザブンと頭から海水を浴びせられた。頭から胴、足の先までびしょぬれになった。持っていた戦闘記録もずぶぬれ、集中砲撃が霧島の周囲至近距離に落下し、その水柱に艦がもぐり込んだのである。戦闘艦橋は水面から数十メートルの高さにある。霧島は少し右舷に傾きかけた。左舷に魚雷が命中したのであろう、高い艦橋にいと数度の傾斜も大きく感じられていい気持ではない。今や霧島は機関をやられ、舵をやられ主なる砲塔はほとんど浸水、受けた被弾、主砲二十数発、副砲数十発、魚雷五、六本、満身創痍、戦闘力潰滅。そして米軍航空基地が島飛行場正面に鎮座する。艦は動かず、死神は刻々私の顔をのぞき込んでいるようだ。

故国を隔てる幾万海里、ここガ島沖合で二十三歳を一期として私は経末を告げるのか、死は寸刻の間に迫った。艦橋は死の静寂……艦長と副長は何か暗黒な艦橋で相談している。静かな声で「それでは総員退去させましょう」。大野副長は静かに艦長に言う。大野副長が今次戦争の客観情勢を判断、乗員の尊き生命を救うべく艦長に進言した結果であった。

「総員集合」の命令により甲板は各分隊毎に静粛に整列する。右舷後部にまず横付けになったのは駆逐艦朝雲であった。朝雲から横木が霧島の舷側に渡たされた。私が横木に足をかけようとした瞬間、横合いから重傷者をついだ兵士が足を出した。私は出しかけた足をひっこめてその兵士を先に渡した。次の瞬間、私はその横木を渡って朝雲の甲板に飛び移った。そして一瞬、霧島をふり返ってみると、まさにその瞬間であつた。霧島はその艦尾を海面に突込み艦首を高く突き立てた。朝雲は突差に綱をはずした。朝雲は霧島から離れた。朝雲が綱をはずした瞬間、霧島は艦首を高く持ちあげたかと思うと、そのまま一挙に海中に姿を没した。我が戦艦霧島はしばらくして南海の底深く沈んで行った。時に昭和十七年十一月十五日午前一時二十三分であつた。

◆佐藤 房夫（73歳）

終戦の日の思い出

戦場・軍隊 ●

中支戦線で兵站自動車隊として四年半の勤務を終えて昭和十八年に召集解除、それから二年後昭和二十年五月に二度目の召集で勤務したのは私の住んでいた近くの鳥居坂上の東洋英和女学校の校舎を本拠としていた首都及び関東一円を統轄する東部防衛軍司令部と東京司管区司令部で司令官や参謀が公用、私用で使用する乗用車やサイドカー付きのオートバイの操縦手として毎日走りまわっていたのである。麻布十番の商店街を中心に附近一帯は五月十日、二十五日の空襲でほとんど焼野原と化し、母も防空壕生活から妻の実家のある山形県へ疎開して行った。

本土決戦を叫ぶまで追い詰められた戦況は、我々にも敗戦の途をたどりつつある事が感じられて来た頃、八月に入り原爆投下、司令部の動きが慌しくピリピリした異常な緊張感が伝わってきた。八月十五日、司令部の全将兵に天皇陛下の重大なお言葉の放送があるから全員講堂に集合するように達示があった。私は多分、非常局面に当たり士気を鼓舞する内容か、あるいは事によると？という感じであった。やはり終戦

のお言葉であった。ついに戦争に負けたのだという決定的な事実が明示された訳だ。放送直後の講堂の中は意外と冷静さを保っていた。予期されていた事がとうとう来たという自覚の表れであろう。外に出る。時を合わせたように轟音と共にB29爆撃機が数機頭上を超低空で示威飛行か、爆弾倉を開き大きな爆弾を二列懸架して、何か事あれば何時でも落とすぞといわんばかりに旋回を始めた。今までは高々度でしか見なかったB29を至近距離に仰ぎ見て敗北感がヒシヒシと感ぜられた。しかし、もうこれからは、あの自分の身体をめがけて、ヒューという身の縮むような音をたてて落下して来る焼夷弾の空襲もなくなり、安心して眠れる平和が戻るといふ安堵感で、ホッと気が緩んだ。と同時に我々軍人は戦地での民衆が経験した状況が眼前に彷彿と浮かび上がって来る。

この狭い日本国土ではいくら山奥へ逃れても長期的な掃蕩作戦ではいずれは捕えられバリケードで囲まれた捕虜收容所に閉じ込められ、苛酷な労働や死が待ち受けるのだろうと思ふとジツとしてはいられないような気持ちになった。今でも

東洋英和女学校（当時は東洋永和女学校と改称されていた）の前を通り、当時と同じ大谷石で積んだ塀（現在は塗装してある）を見ると、頭上を威圧するように飛んで来たB29の機体と心の動揺を昨日のことのように思い出すのである。

